

清少納言評を読み比べる

——高校二年生・古典（古文・漢文）の授業実践——

加藤直志

はじめに

多くの高校では、文法知識等を駆使して口語訳を完成させるとい
うのが一般的な古文の授業であろう。しかしながら、それだけでは
生徒たちの古典文学の世界への理解は浅いものに留まってしまう。
また、近年のいくつかの学力調査からは、日本の子供達が、自由記
述などを苦手としているという傾向も指摘されている。本実践は、
それらの点を踏まえ、類似のテーマについて書かれた複数のテクス
トを読み、それについて生徒間で話し合わせることで、古典文学へ
の理解を深めさせることをねらいとしたものである。『枕草子』を
教科書で読んだ後、『十訓抄』と『紫式部日記』の清少納言評を読
み比べて、その評価に差異が生じた要因について考えさせた。個々
で課題に取り組んだ後、生徒間で話し合うことで、答えが一つに定

清少納言評を読み比べる

まりにくい課題に対して協同で解決を目指す授業を試みた。^①

一、授業のねらいと方法

本節では、近年の学力調査の結果や、国語教育に関する種々の議
論を引用しながら、本実践で、筆者（授業者）が生徒にどのような
力をつけさせたいと考えたのかを述べる。

二〇一二年実施のPISA調査の結果からは、多くの項目で前回
よりも改善が見られたものの、読解力における自由記述の無答率の
高さがこれまで同様に指摘されている。^②この点について、二〇〇九
年以前の同調査や全国学力・学習状況調査などを踏まえて心理学的
見地から詳細に分析した藤村宣之は、次のように述べている。

日本の子どもが相対的に苦手としていると考えられるのが、概
念的理解（conceptual understanding）やそれに関連する思考

プロセスの表現である。それを、ここでは「わかる学力」と表現する。国語の場合には、テキスト中の新しい情報と自分の既知知識を関連づけて理解したり、判断の根拠を自分の言葉で説明したりすることなどが含まれる^③。

このような力を高めるために藤村は、「①多様な考えが可能な問題設定・発問、②個別探究を通じた自己説明、③多様な考えを関連づける集団討論」といった特徴を持つ「協同的探究学習」を提唱している。

さて、ここで「多様な考え」という語が出てきたが、国語の授業で「多様な考え」を取り扱うに際しては、読みには一つの正解があると考えられるのか、あるいは読者の数だけ存在すると考えるのかという、国語教育における長年の議論が我々の前に立ちはだかる。しかしながら、筆者は、この両者の二者択一というよりも、むしろ、次に引く鈴木泰恵に共感するところが大きい。

〈読者〉一人ひとりの相対性を確認し、互いに自他の〈読み〉の妥当性に自覚的であるべく導きつつ、〈読者〉たる学生たちが、一人ひとり、自身で考え読む力をつけていけるようになるのが、国語教育であるはずだ^⑥。

本実践では、解答が一つに定まりにくい課題設定を行い、教材作成の際にもそれを促すような文言を入れることもあった。しかしな

がら、生徒達から多様な意見を引き出すことそのものを目的としているわけではないし、多様な意見のすべてを一様に認めるというわけでもない。そうではなく、それらの意見の間の質的な差について、生徒達が意識的になった上で、それらをうまく関連づけて説明できる力をつけさせ、古典文学への理解を深めさせることこそが、この授業のねらいである。

古典文学への理解といっても様々あるが、本実践では、以下のようなことを目指して、『十訓抄』と『紫式部日記』とを並置した教材を作成した。これらのテキストには、『枕草子』という、いわば権威化されたテキストの作者とされる清少納言に対する正反対の評価が書かれている。これらを読み比べることで、与えられたテキストをそのまま無批判に受け入れるのではなく、それを相対化する視点に気づかせたいと考えた^⑦。また、読後に生徒相互で意見を交流させた上で、複数の意見の関連づけを行わせた。清少納言への評価とそのテキストの成立年代といった、一見すると別々の指摘の間に、実は関連性が見出せるということに気づかせることによって、さらに深い理解を目指した。筆者はこれまでも、教育心理学の知見を参考にした授業実践を行ってきたが^⑧、古典の授業で行ったのは今回が初めてである。

二、教材と発問

本節では、今回の授業実践で使用した教材（【教材(1)(2)(3)(4)】とワークシート（【教材(5)】）について紹介する。【教材(1)(2)】は教科書等の教材であり、【教材(3)(4)】は筆者が作成したものである。カッコ内の数字は授業で取り扱った順と一致する。

【教材(1)】『枕草子』⁹⁾

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語りなどして集まり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。人々も「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人にはさべきなめり。」と言ふ。

【教材(2)】『白氏文集』¹⁰⁾

香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁
日高睡足猶慵起 小閣重衾不怕寒
遺愛寺鐘欵枕聽 香炉峰雪撥簾看
匡廬便是逃名地 司馬仍為送老官
心泰身寧是歸处 故鄉何独在長安

清少納言評を読み比べる

【教材(3)】『十訓抄』¹¹⁾、【教材(4)】『紫式部日記』¹²⁾

自主教材 清少納言は、昔の人にとのように評されていたのか

【十訓抄】一ノ二十一

同^{*1)}院 雪いとおもしろく降りたりける冬の朝、端近く居出でさせ給ひて、雪御覧じけるに、「^{*2)}香炉峰のありさま、いかならむ」と仰せられければ、清少納言、御前に候ひけるが、申すことはなくて、御簾をおしはりたりける。世の末まで優なる例にいひ伝へられける。

かの香炉峰のことは、白楽天、老ののち、この山のふもとに、一つの草堂をしめて、住み給ひける時の詩にいはいはく、

遺愛寺鐘欵枕聽 遺愛寺の鐘は枕を敬てて聴く

香炉峰雪撥簾看 香炉峰の雪は簾を撥けて看る

とあるを、帝、仰せ出だされけるによりて、御簾をば上げけるなり。

かの清少納言は天曆の御時、梨壺の五人の歌仙の内、清原元輔、女にて、やまとことばも、家の風吹き伝へたりけるうへ、心ざまわりなく優にて、をりにつけたる振舞いみじきこと多かりけり。

*1 一条院（一条天皇）のこと。ただし、『枕草子』では、

一条天皇の中宮定子となつてゐる。

*2 中国江西省にある山。

*3 天曆五年（九五一年）、村上天皇の勅命により、内裏の

梨壺で『後撰和歌集』の編纂や『万葉集』の訓点事業にあたった五人。梨壺とは、昭陽舎の別名。庭に梨が植えられていたことによる。

【紫式部日記】

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書き散らして侍るほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむ、と思ひ好める人は、かならず見劣りし、行末うたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすごうすずるなる折も、ものあはれにすすみ、をかきことも見過ぐさぬほどに、おのづからさるまじく、あだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のほて、いかでかはよく侍らむ。

*1 「真名」は、漢字のことをいい、「真名書き散らす」は、漢文（漢籍）を書くことをいう。上原作和は「作者は『枕草子』の漢籍引用が詩句を吟じたりする直裁的な方法であり、これを自身の『源氏物語』や詠歌における漢籍引用の方法のほうが、文脈に巧みに溶け込み、洗練されているものと自負していたのであろう。」という。（上原作和・廣田收『紫式部と和歌の世界』二〇一一年、武蔵野書院）

*2 人と違っていたいと好んで思っている人。

*3 風流なふるまいばかりするようになった人。

定番教材である【教材(1)(2)】に加えて、【教材(3)(4)】を作成した。これらのテキストを教材化する際には、複数の清少納言評を読むだけで終わるのではなく、それに関する多様な考えの比較検討・関連づけ、といった授業を展開することも考えた。そのため、文学研究の成果も積極的に取り入れることを試み、【教材(4)】で、紫式部が清少納言の漢文引用の方法について批判する箇所についての、上原作和の注釈を引用した。これは、生徒達から多様性のある解答を導き出すのに適したヒントになるとの判断からである。『紫式部日記』が清少納言による漢籍引用の方法全体への評価であるのに対し、『十訓抄』は『枕草子』の個別の箇所を中心とした記述ではあるものの、「心ざまわりなく優にて、をりにつけたる振舞いみじきこと多かりけり。」と、清少納言そのものへの評価にも言及していることから、両テキストを並置して取り扱った。

また、生徒達に示してはいないが、『枕草子』「香炉峰の雪」の段の享受史を扱っている中島和歌子の論も、授業の展開を構想する上で参考にした。

自分自身の経験を記すことと、他人で、しかも時代を隔てた中世人・近世人が語るのとは、作者の立場の違いはあまりにも大きいと言える。又各作品には固有の主題や文脈があり、それによる拘束も大きいことであらう。更に作者の問題だけでなく、

読者層にしても、その範囲やそこにおける一般的教養の程度が、『枕草子』とは全く異なっているのである。^④

次に、これらのテキストの読後に用いたワークシート（教材(5)）を紹介する。

【教材(5) ワークシート

課題一 『十訓抄』と『紫式部日記』で、清少納言への評価が大きく異なる。この違いはどういうところから来ていると考えられるだろうか。自分で考えて説明してみよう。可能であればそう考えた根拠も踏まえた説明をしよう。

【個別探究Ⅰ】

課題二 四人グループを作ります。グループの中で、お互いの考えを発表しよう。

【協同探究】

課題三 グループとしての意見をまとめよう。誰か一人の意見を単純に選ぶというだけでなく、誰かの意見をもとにみんなで修正を加えたり、複数の人の意見を組み合わせたりするなど、グループ内での話し合いを通じて、意見を練り上げてみよう。

【協同探究】

課題四 各グループで発表してもらいます。

【協同探究】

課題五 各グループの発表を聞き、それぞれの発表内容を、ポイント別に整理してみよう。

【協同探究】

課題六 これまでの学習を生かして、課題一についても一度考

えてみよう。

【個別探究Ⅱ】

課題一がこの授業の中心となる発問である。古典文学の価値について相対的な視点を持つことにつながる発問であること、さらに言えば、有名だから素晴らしい、教科書に載っているから素晴らしい、先生が素晴らしいと言っているから素晴らしい、という発想を乗り越えることを目標した発問である。次に、正解が一つにはなりにくい発問であると同時に、複数出るであろう解答の関連づけが得意な発問という点を意識した。最初にこの課題について各個人で考え、記述させた後、小グループ、クラス全体という流れで協同的な学習を行い、最後の課題六で、課題一と同じ課題に再度取り組ませた。

二、授業の詳細と記述の変化

本節では、授業内容の詳細（表(1)(3)）と、授業の前後での生徒達の記述内容の変化（表(2)(4)(5)(6)）について分析する。

まず、この実践の授業内容を示す（表(1)）。高校二年生、三十九名のクラスを対象に授業を行った（文理分けは行っていない）。

【表(1)】 授業内容

時数	内容
1～4	(ア)『十訓抄』と『紫式部日記』の読解に取り組みました。 ▽一般的な古文の授業（文法・重要古語→現代語訳）を行った。
5	(イ)ワークシートの課題一に取り組みました。（二十分） 【個別探究Ⅰ】 (ウ)ワークシートの課題二に取り組みました。（十分） 【協同探究Ⅱ】 (エ)ワークシートの課題三に取り組みました。（二十分） 【協同探究Ⅱ】 ▽授業者による支援はほとんど行わなかった。何をするか の指示をした程度であった。 ▽ワークシートを回収し、授業者が、誰（どのグループ）が どんなことを書いているかを把握し、次時の授業の進め方を 考えた。
	(オ)ワークシートの課題四・五に取り組みました。（四十分） 【協同探究Ⅱ】 ▽授業者が全体の司会をするとともに、意見を板書した。 ▽板書を使った整理がしやすいような順番でグループ授

6
<p>プを指名した。</p> <p>▽グループの中では取り上げられなかったが、課題一で優れた意見を書いた生徒を指名し、意見をクラス全体に紹介した。</p> <p>(カ)ワークシートの課題六に取り組みました。（十分）</p> <p>【個別探究Ⅱ】</p>
公開

正解が一つに絞れないような課題設定になっているが、明らかに外れなものや根拠不明なものは、ワークシートを回収した際に赤ペンで助言を書き加えた。

次に、【表(1)】(イ)【個別探究Ⅰ】の段階で、どのような記述が多かったかを示す【表(2)】。一人で複数の観点による記述をしている者も多いため、クラスの生徒数よりも延べ人数は多くなっている。

【表(2)】 課題一「個別探究Ⅰ」の結果

- (A) 清少納言と紫式部の政治的対立：二十一名
- (B) 『紫式部日記』と『十訓抄』の時代差：二十名
- (C) 清少納言と紫式部の文学性の対立：八名
- (D) 紫式部と『十訓抄』の作者の問題：八名
- (E) その他：九名

課題一は、協同探究学習の「個別探究Ⅰ」に該当するが、ここ

では(A)(B)についての記述が多かった。一条天皇の後宮の問題や、作品の成立年代といった、文学史の知識(便宜上、テクストの外部と呼ぶ)に基づいて考えた生徒が多かったといえる。ただし、ただ成立年代の差を指摘しただけではなく、鎌倉時代と平安時代のそれぞれの時代背景にまで言及できていた記述が多かった。これは予想通りであったが、その一方で、テクストの内部にも目を向けて欲しかったので、上原・廣田の注釈書を注に引用した。その結果、(C)のような意見も出た。誘導的すぎるという自戒はあるものの、古典文学教育の特性上、考えるための情報がある程度、授業者から提供することはやむを得ない面もある。

次に、【表(1)】(オ)課題四・五について、板書【表(3)】を紹介しながら、詳細を述べる。

【表(3)】「協同探究」場面での板書内容

<p>政治的対立</p> <p>一条天皇の後宮の問題</p> <p>紫式部と清少納言はライバル</p> <p>【紫式部日記】と【十訓抄】の時代差</p> <p>鎌倉から平安へのあこがれ</p> <p>後世には印象的なのところが伝</p>	<p>その他</p> <p>評価の観点が違う</p> <p>【十訓抄】…行動</p> <p>【紫式部日記】…文章</p> <p>〈補足〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 鎌倉時代における日本古典
---	--

わる

本人を知っているか否か

文学性の対立

漢詩文引用の方法の差異

作者の問題

【十訓抄】作者は庶民?

紫式部は同時代作家の目線

文学の権威化

・清少納言をさげすむ

←

周囲の評価を下げる

・直接引用の方が分かりやすい

い

↓【十訓抄】の方が高評価

読者の問題

課題五に取り組ませた後、指名した生徒の発言内容を組み立てながら、板書をしていった。(補足)については、課題三で取り上げられることがなかったものの、課題一では書かれていた意見のうち他の生徒にも紹介しなかった意見を発表させた。グループ探究を挟むことにより、各自が必ず発言する機会を作ることができるが、優れた意見を取り上げず、クラス全体に発表しないということも起こるため、授業者による支援が必要である。

項目別に板書した後、生徒の意見をもとにしなが、相互の関連性についても、授業者が次のように言及した。

・政治的対立があったから、清少納言を蔑むことで周囲の評価を下げたかった。そこで、漢詩文引用の方法の違いについて言及したのではないか。

・同時代作家としての目線で書かれる『紫式部日記』と違い、『十訓抄』の時代には日本古典文学が権威化していたため、清少納言の高評価につながっているのではないかな。

・教養の高い平安貴族が書いた『紫式部日記』と違い、『十訓抄』の作者は庶民的な人物であり、直接的な漢詩文引用の方が理解しやすいのではないかな。また、『十訓抄』の時代には、読者も武士などが多く、わかりやすい引用方法の方が好まれたのではないかな。

生徒達から出た複数の意見の関連づけを行ったことで、『十訓抄』の成立をめぐる問題^④にも関連する部分にまで、授業の内容を深めることができた。また、ワークシートを回収した際に、生徒達の間には「平安時代＝貴族社会、鎌倉時代＝武家社会」というステレオタイプな理解があることもわかった。政治的な実権が弱まっただけで、鎌倉時代以降にも公家は存在し、文化の担い手として存在感を発揮していたということを授業者が補足した。

最後に、【表(1)】(カ)課題六「個別探究Ⅱ」についての、結果【表(4)(5)】及びその考察を示す。また、生徒達の記述内容【表(6)】も紹介する。

【表(4)】課題六「個別探究Ⅱ」の結果

- (A) 清少納言と紫式部の政治的対立…三十一名
 (B) 『紫式部日記』と『十訓抄』の時代差…三十五名
 (C) 清少納言と紫式部の文学性の対立…二十名
 (D) 紫式部と『十訓抄』の作者の問題…十二名
 (E) その他…五名

(A)(B)の意見を軸にしながらも、(C)(D)の意見を視野に入れた記述が増えた。とはいえ、(A)と(D)をただ羅列しただけの記述も見られ、理解が深まったのではなく、新たな情報を得たことで知識が増えただけの可能性もある。そこで、複数の意見の関連づけがどの程度できていたのかという観点でも、課題一と課題六の結果を比較してみた【表(5)】。

【表(5)】課題一「個別探究Ⅰ」と課題六「個別探究Ⅱ」の変化(複数の意見の関連づけ)

課題一…複数の意見を記述していても、羅列に留まり、それらを関連づけたものはあまりなかった。

課題六…ある程度増加した。

- (A)と(B)とを関連づけた記述《Ⅰ群》…三名
 (A)と(C)とを関連づけた記述《Ⅱ群》…二名

- (A)と(D)とを関連づけた記述《Ⅲ群》：二名
 (B)と(C)とを関連づけた記述《Ⅳ群》：三名
 (B)と(D)とを関連づけた記述《Ⅴ群》：三名
 (A)と(B)と(C)とを関連づけた記述《Ⅵ群》：四名

人数が増えたとはいえ、まだ一部の生徒に過ぎず、複数の意見の関連づけを通しての深い理解、という点では課題が残った。また、単なる羅列なのか、関連づけているのが、判断しにくい記述も多く、評価が難しい面があった。

実際に生徒達が書いたものの一部を紹介しておく【表(6)】。下段の傍線は筆者により、アルファベットは【表(2)(4)】で用いた記述内容の分類記号に従った。生徒の記述の、どの部分とどの部分について関連づけができていると筆者が判断したのかがわかるようになるために付したものである。

【表(6)】生徒達の記述内容の変化（誤字は訂正して引用した）

課題一【個別探究Ⅰ】	課題六【個別探究Ⅱ】
十訓抄と紫式部日記では、書かれた時代が違い、そこから評価の差が出た？ 十訓抄は清少納言が生きていた時代よ	鎌倉時代は武士の時代であり、平安時代へのあこがれもあったために、十訓抄では高評価 ^A それに対して清少納言と紫式部

清少納言評を読み比べる

《Ⅰ群》

り後に書かれていて、御簾を上げたときのような表立った行動だけが伝わって、それが高い評価につながった。ここで、清少納言についての悪い言い伝えがなければ、清少納言のことを悪く書きようがない。紫式部日記は清少納言が生きた時代と同じ時に書かれていて、清少納言の良い面も悪い面も知った上で低評価になった。そもそも観点が違う？ 十訓抄は主に行動について、紫式部日記は清少納言が書く文章について。

部はライバル関係にあったので、紫式部日記では多少批判的に描かれている。またこの二人には文学性の対立もあり、清少納言の漢詩引用は直接的であったが、紫式部は間接的。

どちらも一
 条天皇の中
 宮 敵対関
 係があった
 のでは？
 十訓抄：漢文を引用
 (そのまま)

^A紫式部日記で清少納言が悪く言われているのは、やはり二人がライバルのような関係であったことが大元なのではないかと思う。嫌いだから、紫式部は清少納言の感性が受け入れられない(清少納言が書

《Ⅲ群》	《Ⅱ群》
<p>書かれた時代の価値観の違い 「十訓抄」は鎌倉、「紫式部日記」は平安。漢詩をきいて何を伝えたいのか知識をどういかすのかという観点において、鎌倉のときは、すだれを上げたりなど気持ちが読みとれて、知識も上手く生かしていると好評価されるが、平安のときは、この行為は利口ぶって人の</p>	<p>枕草子：漢文ほぼ引用 価値観があっている → 紫式部：引用するなんてという考え方</p>
<p>二人はライバル関係だった。 ^D「十訓抄」では清少納言の良いことの言い伝えをもとに、庶民など、知識があまり無い人が書いたため、清少納言・彼女の詩をすばらしいと考えたが、紫式部は、清少納言の周囲の評価を下げることで、自分のすばらしさを訴え、自分の方が上だということを主張したか</p>	<p>いたというフィルターがかかっている（ではないか）と感じた。また十訓抄で好評価をされている理由としては貴族が平安を良い時代だと思っていたことが大きいのだと思うが、平安時代の良さを枕草子を例にして伝えているという意見にはなるほど、と思っ</p>
《Ⅳ群》	
<p>紫式部は、清少納言が活躍した時代と同じ時に同じ文学者として活躍していたので、いわゆるライバル的な存在であったので、このような評価をしたのだと思う。また、紫式部は『源氏物語』のような話を書いていて、清少納言の清純な感じとは、逆だったので、このような文を書いた。十訓抄は、成立が鎌倉時代だったので、「香炉峰の雪」の下り</p>	<p>機嫌をとる行為であり、中身の無い人がすることだと悪い評価を受けている。 紫式部は間接的・清少納言は直接的 ↓紫式部は自分のほうがすばらしいものだと思い、清少納言をけなしている!?</p>
<p>『十訓抄』は時代が鎌倉時代だったので、武士の時代だったこともあり、^C単刀直入な引用の清少納言がうけた。また、後世には印象的なことしか伝わらない。一方、^B『紫式部日記』は同時代作家の目線として、清少納言を批評しているため、否定的な文章になっている。また、読者の清少納言の評価を下げるためにさげすむような表現をしていたの</p>	<p>つたのではないか。 時代差 時代によって読む人が異なるため、求められるニーズが異なり、高評価する対象が違う。また鎌倉には、清少納言の良い印象が受け継がれ、本人も生きていないため、評価が違うのではないか。</p>

《V群》	
<p>とかを聞いているので、漢文も分かる教養のある人と思われているのだと思う。</p>	<p>『紫式部日記』の作者・紫式部は清少納言と活躍した時代が同じで、お互い父が有名な歌人であり、和漢に精通しているところや、中宮に仕えていたところなど、様々な共通点があることから、2人はライバル関係にあったと思う。</p> <p>↓ライバル視!!</p> <p>紫式部自身も漢詩に通じていたが、清少納言のこれみよがしな感じが鼻についた。</p> <p>『十訓抄』は、それほど漢詩に通じていない作者だった? 清少納言のファンだった。</p>
<p>だと思う。</p>	<p>また、2人の漢詩に対する考え方、文章の書き方の違いによる対立もあった。『十訓抄』と『紫式部日記』は書かれた時代が鎌倉時代と平安時代で、『紫式部日記』は清少納言の生きてる時なので様々な姿、評判もわかっている(作者が)また、貴族中心の社会であったため、高度な紫式部の文章が好まれた(かもしれない)。それに対し、『十訓抄』は平安への強いあこがれがあった時代だったので、平安時代の優雅さが表れている清少納言を評価し、武士中心の社会だったことから、清少納言の文章が好まれたのではないか。</p>

清少納言評を読み比べる

《VI群》	
<p>十訓抄は鎌倉時代に書かれており、その当時の貴族は貴族が国を支配していた平安時代を良い時代だと考えていたもので、平安時代の貴族である清少納言を評価して、この頃のすばらしさを表現しなかったから。一方、『紫式部日記』は、作者の紫式部が天皇家の彰子に仕えており、同じ天皇家である定子に仕えていた清少納言とはライバル関係にあったため、清少納言のことを批判して、自分の方がすごいと示すため。</p>	<p>『十訓抄』は鎌倉時代に書かれていて、その当時は平安時代にあこがれを持っており、また直接的に清少納言のことを知らなかったために、印象的な事柄しか伝わっていないために好意的に書かれていた。『紫式部日記』は紫式部と清少納言はお互い天皇家に仕えており、ライバル関係となっており、紫式部は清少納言のことを直接知っていたことと、紫式部と清少納言の文学性の違いにより批判的なことを書いた。</p>

代わりに

本稿では、『枕草子』や漢詩を学んだ後、『紫式部日記』と『十訓抄』という、正反対の清少納言評を読み比べることで、古典文学の世界へのより深い理解を目指した実践を紹介した。権威化されているようなテキストにも、様々な評価があり、その背景には、時代状

況や政治情勢なども関連しているということに気づかせることができた。

今後の課題としては、次のようなことが浮かび上がってきた。一通り学習をした後で書かせた課題六の記述でも、授業で取り上げられた意見を羅列しただけのものがかなり見られた。自分が気づかなかった観点に触れることができたという意味では成果があったといえようが、それぞれの意見の関連性や質的な差にまでは理解が及んでいない生徒が多かったと思われる。

また、本実践では、成立年代の違いや作者などが問題の中心になった。しかしながら、生徒からは『紫式部日記』と『十訓抄』では、評価の観点が違う」という、本文（テキストの内部）をしつかりと読むことで導き出される意見も出ていた。本文の読みにこだわった議論も大変重要であり、今後は、そのような課題設定による授業も行っていきたい。

注

- ① 本稿で紹介する授業実践は、二〇一二年二月十日（金）に開催された「平成二十三年度中等教育研究協議会・SSH第1年次研究成果発表会（2期）」（於・名古屋大学教育学部附属中・高等学校）における公開授業をもとにしている。
- ② 文部科学省・国立政策研究所『OECD生徒の学習到達度調査』20

12年調査国際結果の要約』、二〇一三年十二月、十六頁。(http://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2012_result_outline.pdf 二〇一四年三月二十四日閲覧)

③ 藤村宣之『数学的・科学的リテラシーの心理学 子どもの学力はどう高まるか』(二〇一二年、有斐閣)、五十六頁。

④ 注③前掲書、六十二頁。

⑤ 須貝千里「授業をひらく〈読み〉の可能性——文学教育の根拠——」『日本文学』第五十卷十二号、二〇〇一年十二月）などに詳しい。

⑥ 鈴木泰恵「開かれた『更級日記』へ——テキスト論による試み」(鈴木泰恵・高木信・助川幸逸郎・黒木朋興『国語教育』とテキスト論』(二〇〇九年、ひつじ書房)。

⑦ 一般の指導要領改訂においても、「古典を読み味わい作品の価値について考察する」「古典を読み比べ、共通点や相違点などについて説明する」等が要点として掲げられており、本実践とも関連が深い。(『高等学校学習指導要領解説 国語編 平成22年6月』(教育出版、「第1章 第1節 3 カ古典B」、八頁)

⑧ 拙稿「協同的探究学習」を用いた国語教育——中学校における実践例「説明文の読み比べ」及び「意見文を書く」——」(『同志社国文学』第七十四号、二〇一一年三月) など。

⑨ 柴田武・金谷治ほか編『高等学校 古典 古文編「改訂版」』(二〇〇八年、三省堂)。

⑩ 鎌田正監修、江連隆・青木五郎著『理解しやすい漢文【新課程版】』(二〇〇三年、文英堂) ※教材の本文には訓点が付してあるが、本稿の引用では省略した。

⑪ 浅見和彦『新編日本古典文学全集 十訓抄』(一九九七年、小学館)をもとに、筆者が教材化した。

⑫ 中野幸一『新編日本古典文学全集 紫式部日記』（一九九四年、小学館）をもとに、筆者が教材化した。

⑬ 上原作和・廣田收『紫式部と和歌の世界 一冊で読む紫式部家集 訳注付』（二〇一一年、武蔵野書院）、二一六頁。同書は、二〇一二年四月に「新訂版」が刊行されていることを付言しておく。

⑭ 中島和歌子「枕草子「香炉峯の雪」の段の受容をめぐって——中世・近世の説話集を中心に——」（神戸大学文学部『国文論叢』第十八号、一九九一年三月）。

⑮ 注⑬前掲書。

⑯ 注⑪前掲書「解説」一五〇六頁にこうある。

従来、『十訓抄』は何となく、京都、乃至は京都周辺での成立と思われてきたが、案外、その成立の場所は鎌倉に近いのではないか。思想的、内容的にも『鎌倉』と共通するものが多い（後略）

〔付記〕 本稿は、二〇一二年七月一日（日）に開催された「日本文学協会第三十二回研究発表大会」（於・長野県短期大学）における口頭発表をまとめたものです。席上、ご教示下さった皆様に御礼申し上げます。また、本実践を行うに際しては、藤村宣之氏よりご助言をいただきました。御礼申し上げます。